

八王子市制百周年を祝う 清滝駅壁面装飾 安全祈願法要厳修

九月一日(金)

九月一日、高尾山麓のケーブルカー清滝駅前広場において、清滝駅壁面装飾祈願祭が行われた。

清滝駅の駅舎に装飾されたのは天狗面のモザイクカルチャーである。モザイクカルチャーとは、数千株の植物を組み合わせて、オブジェに埋め込んで作る立体型の造形物のことである。

この壁面装飾は、八王子市が本年に市政百周年を迎えたことを記念して行う、「第三十四回全国都市緑化はちおうじフェア」の一環として高尾登山電鉄(株)により実施されている。この天狗面は都市緑化フェアの終了する十月十五日まで設置される予定である。

高尾山口エリアはこの都市緑化フェアのサテライト会場の一つに指定されており、高尾山薬王院もスポット会場の一つとなっている。



登山者の安全を願い法要が行われる



スポット会場の薬王院にも大勢の人

スケッチブックの風景

シャンソン歌手 友納あけみ

夏が終わろうとしていきます。夕暮れの風はもう秋の匂いを運んでいきます。夏休みも終わりを告げる八月末の十日間くらいの日々を、私たち家族は毎年、妙高高原にある山荘で過ごしていました。

それは、父が亡くなる一年前、私が小学校に入った年に始まり、高校を出るまでの十二、三年続きました。思えば、そこは癌で余命僅かだった父との最初で最後の旅の場所でもあったのです。

数少ない父との記憶のひとつに何故か高く父の手で抱き上げられているシーンがあり、多分、それは、あの山荘での出来事だったのでは？と思っています。

父が亡くなってからも毎年、この夏の旅は続いていました。私と兄は宿題の山を抱え、快適で涼

しく、宿題を終らす時だったのですが、母は、この長い時をひたすらポーツと妙高山を眺めて過ごしていました。幼い私には、母が父の代わりに忙しく働いていたので、ただ、日頃の疲れを癒しているだけにしか思えませんでした。



ある時、古い筆筒の奥から父のスケッチブックが出てきました。その中には、たくさん山荘から見た妙高山の風景が描かれていました。多分、あの最後の旅の時に描いたものでしょう。仮退院した父には病気のことも余命のことも知らされてなかったもので、復帰する前の養生のつもりで好きだったスケッチをしながらか時を過ごしていたのだと思います。あの山荘の、あの窓から見える妙

高山！

父が逝ってしまった時、母は三十九歳。その後の十年余りに、母は毎年、何を思いながら、あの風景をみていたのでしょうか。もう、あの頃の母より歳を重ねてしまった今になって、ふと、そんなことを考えています。幼かった私には母は母親でしかなく、その胸に去来する想いなど、はかり知ることではできませんでした。

母が逝ってしまったから、十二年が過ぎようとしています。あの山荘は、今ほもう壊されてしまいましたが、随分、訪れていない妙高高原！父と母の写真を持って、一度訪れてみたいと思っています。あのスケッチブックを抱えて！

院内散歩 9

薬王院の展示物



チェンソーアート「尾長鳥」
作・城所ケイジ

聖天堂開扉法要

九月九日～十日



普段は公開されていない聖天堂の扉が開かれ僧侶の読経が境内に響き渡る

高尾山の昆虫

オオカマキリ

96



盛夏を謳歌したセミたちの声が次第に遠ざかり、代わりに秋の虫の音色が聞こえる頃、草むらでは昆虫界最強のハンターであるカマキリの姿が目につくことでしょう。

中でもオオカマキリは最大種でカマキリの仲間の王様の風情があります。他の昆虫類を捕食するばかりか、食物連鎖では下位に位置する昆虫のカマキリが、両生類のカエルや爬虫類のトカゲ、小型の鳥類、そしてネズミ等の小型哺乳類までも捕食するのは驚きです。

カマキリの通常の動作自体は決して速くはありませんが、獲物にそっと忍び寄り待ち伏せしたりして、瞬時に鎌状の前脚で捕獲してしまう様はまさしく必殺仕事人のようなプロの殺し屋を思わせます。

分類的にはゴキブリに近いとされますが、鎌の武器を持つ形状や並外れた闘争心、攻撃性から子供たちに人気があるのも頷けます。昆虫としては十センチに近い大型種ですが、これが数メートルに及ぶような生物でしたら、さぞ人類にとってはクマ以上の脅威だっただろうと思ってしまう。

(標本 TAKAO 599 MUSEUM・文松島 孝)